

ヨシュア記23：1-16「ヨシュアの別れの言葉」

23:1 【主】が周囲のすべての敵から守って、イスラエルに安住を許されて後、多くの日がたち、ヨシュアは年を重ねて老人になっていた。23:2 ヨシュアは全イスラエル、その長老たちや、かしらたちや、さばきつかさたち、およびつかさたちを呼び寄せて彼らに言った。「私は年を重ねて、老人になった。23:3 あなたがたは、あなたがたの神、【主】が、あなたがたのために、これらすべての国々に行ったことをことごとく見た。あなたがたのために戦ったのは、あなたがたの神、【主】だからである。23:4 見よ。私は、ヨルダン川から日の入るほうの大海まで、これらの残っている国々と、すでに私が断ち滅ぼしたすべての国々とを、相続地として、くじによってあなたがたの部族に分け与えた。23:5 あなたがたの神、【主】ご自身が、あなたがたの前から彼らを追いやり、あなたがたの目の前から追い払う。あなたがたは、あなたがたの神、【主】があなたがたに告げたように、彼らの地を占領しなければならない。23:6 あなたがたは、モーセの律法の書にしるされていることを、ことごとく断固として守り行い、そこから右にも左にもそれではならない。23:7 あなたがたは、これらの国民、あなたがたの中に残っているこれらの国民と交わってはならない。彼らの神々の名を口にしてはならない。それらによって誓ってはならない。それらに仕えてはならない。それらを拝んではならない。23:8 ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、【主】にすがらなければならない。23:9 【主】が、大きくて強い国々を、あなたがたの前から追い払ったので、今日まで、だれもあなたがたの前に立ちはだかることのできる者はいなかった。23:10 あなたがたのひとりだけで千人を追うことができる。あなたがたの神、【主】ご自身が、あなたがたに約束したとおり、あなたがたのために戦われるからである。23:11 あなたがたは、十分に気をつけて、あなたがたの神、【主】を愛しなさい。23:12 しかし、もしもあなたがたが、もう一度墮落して、これらの国民の生き残っている者、すなわち、あなたがたの中に残っている者たちと親しく交わり、彼らと互いに縁を結び、あなたがたが彼らの中に入って行き、彼らもあなたがたの中に入って来るなら、23:13 あなたがたの神、【主】は、もはやこれらの国民を、あなたがたの前から追い払わないことを、しかと知らなければならない。彼らは、あなたがたにとって、わなとなり、落とし穴となり、あなたがたのわき腹にむちとなり、あなたがたの目にとげとなり、あなたがたはついに、あなたがたの神、【主】があなたがたに与えたこの良い地から、滅びうせる。23:14 見よ。きょう、私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、【主】が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。23:15 あなたがたの神、【主】があなたがたについて約束したすべての良いことが、あなたがたに実現したように、【主】はまた、すべての悪いことをあなたがたにもたらし、ついに、あなたがたの神、【主】が、あなたがたに与えたこの良い地から、あなたがたを根絶やしにする。23:16 主があなたがたに命じたあなたがたの神、【主】の契約を、あなたがたが破り、行って、ほかの神々に仕え、それらを拝むなら、【主】の怒りはあなたがたに向かって燃え上がり、あなたがたは主があなたがたに与えられたこの良い地から、ただちに滅びうせる。」

導入

ヨシュア記の学びも終盤に入りました。ヨシュアのこの世の人生も終わろうとしています。どんなときも別れのあいさつをするのは簡単ではありませんが、死期を間近に迎えた老人が語る別れの言葉なら、なおさら重みが増すでしょう。ヨシュアは約110才で亡くなりました（ヨシュア24：29）。ですから、おそらくイスラエルの民の長老や指導者たちに公の場で姿を現したのは、この挨拶が最後だったでしょう。

ヨシュアは、イスラエルの民がエジプトで奴隷生活を送っていたときに、エジプトで生まれました。若い勇士だった彼は、モーセの部下となりました。彼は、斥候として、神がご自身の民に与

えると約束なされたカナンの地を偵察に行った最初の人々のひとりでした。また、その当時20歳以上の成人で、荒野での40年の生活を生き伸びたふたりの人のひとりでもあります。もうひとはカレブでした。このふたりが生き延びられたのは、信仰によります。カナンの人々を追い出せるよう神が助けてくださるといふ神のことばを信じたからです。

ヨシュアは、神がご自身の民に約束されたことを成就できるお方であることを信頼したので、長寿をまっとうし、働きにおいて多くの実を結ぶという祝福に与りました。ヨシュアが特別な人間なのではありません。彼が信頼した神が特別なお方だったのです。

適用

神がご自身のみことばに真実なお方であるとわかるには、信仰の大きな一歩を踏み出し、神を本気で信じるしかないという場合があります。金銭的なニーズを与えてくださると神を信頼することかもしれませんし、神に仕えるために必要な能力を神が与えてくださると神を信じることもかもしれません。同僚や家族がとうてい受け入れてくれない聖書のみことばに従うことかもしれません。

内容が何であれ、神のみことばから確信を得て、真摯な気持ちで踏み出した信仰の一歩なら、神はそれを祝福してくださいませ。

ヨシュアはこれまで幾度となく信仰によって前に踏み出し、神をたたえました。そして、人生の終わりを迎えた彼は、信仰の歩みに報いてくださった神に心をこめて従っていくよう、民を励まそうとしています。

この箇所から、いくつかのことに注目しましょう。

1. ヨシュアの神に対する感謝。(3,9,14節)

ヨシュアは、神がなしてくださった業について、イスラエルの指導者たちに改めて語りました。

3節でヨシュアは繰り返し、自身の神への感謝が指導者たちにも関わることを示します。

「23:3 あなたがたは、あなたがたの神、【主】が、あなたがたのために、これらすべての国々に行ったことをことごとく見た。あなたがたのために戦ったのは、あなたがたの神、【主】だからである。」

ヨシュアは神に感謝していました。そして、その感謝の気持ちをイスラエルの指導者たちも共有するよう促しています。

「感謝する心」とは、神の愛とあわれみに応える心からの感謝だと聖書は教えます。

ヨシュアは、神ご自身が民とともに民のために戦われたことをわかっていました。それは、神の民が土地を獲得し、罪に対する神の裁きを執行するためです。ヨシュアは、神が助けてくださったことに感謝していました。住むための土地を神が与えてくださったことを、イスラエルの指導者にも忘れないでいてほしいと願いました。

14節で、ヨシュアは、神の選びの民の人生に約束されたことはすべて成就したとイスラエルの指導者たちに語りました。

人間は約束しても、それを守れないことがあります。それが人間というものです。神だけが、約束のすべてを成就することのできる唯一のお方です。約束を守る力をお持ちだからです。

クリスチャンは常に、感謝の気持ちに満ちた人でありたいものです。

聖書は、私たちクリスチャンがどのようなことについて感謝すればよいのかを示してくれます。

- a) イエス・キリストを感謝する。—コリント第二9：15で、パウロは、「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」と言いましたが、これは、イエス・キリストを指しています。
- b) 祈りに答えていただけることを感謝する。—サムエル第一2：1-10には、ハンナの感謝の祈りが記されています。これは、祈りに応えて息子を与えてくださった神への感謝の気持ちを表現したものです。
- c) 周囲の人たちを感謝する。—パウロは、ピレモンの信仰について、またイエスとすべての人に対するピレモンの愛について感謝しています。（ピレモン4-5）
- d) 神の備えに感謝する。—イエスも、マタイ14：19で、5千人の人々にお弁当を与えてくださった神に感謝しています。

祝福の源が神ご自身であることを覚えておき、いつも神に感謝しましょう。

ヨシュアは、過去に神がなしてくださったことに感謝しましたが、それにとどまらず、将来神がなしてくださるであろう業にも感謝しました。神の約束は永遠であり、時代を越えてすべての神の民に当てはまるからです。

皆さんも神の民の一員なら、神のお約束は皆さんのものです。

2. ヨシュアの呼びかけ（6-8節、11-13節）

今日の個所で、次に注目していただきたいのは、6-8節、11-13節に登場するヨシュアの呼びかけです。

ヨシュアは、イスラエルの指導者たちに4つのことを呼びかけました。従順、独立、忠実、愛です。

それぞれをひとつひとつ見ていきましょう。

- a) 従順—ここで、ヨシュア1：6-8を読みましょう。

1:6 強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならないからだ。 1:7 ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。これを離れて右にも左にもそれではならない。それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。 1:8 この律法の本を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行うためである。そうすれば、あなたのすることによって繁栄し、また栄えることができるからである。

これは、神からヨシュアへ語られた言葉です。では次に、ヨシュア23：6-8を読みましょう。

23:6 あなたがたは、モーセの律法の本にしるされていることを、ことごとく断固として守り行い、そこから右にも左にもそれではならない。 23:7 あなたがたは、これらの国民、あなたがたの中に残っているこれらの国民と交わってはならない。彼らの神々の名を口にしてはならない。それらによって誓ってはならない。それらに仕えてはならない。それらを拝んではならない。 23:8 ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、【主】にすがらなければならない。

文学の専門家でなくても、このふたつの個所の類似性に気づくはずで。

ヨシュアは、何十年も前に神に召されて土地の獲得を目指しました。このときヨシュアが神に従ったのと同様に神に従うようイスラエルの指導者たちに呼びかけました。

それまでヨシュアが戦いの日々を乗り越えてこられたのは、最初から神のみことばに従い続けたからです。

ヨシュアは心を尽くして完全に神に従いました。

部分的に従ったり、中途半端な気持ちで従っても、神は喜ばれません。神は、私たちの100%の従順をお望みです。

聖書の教えに従うよう人々に呼び掛けるのは良いことですが、自分自身も従っているように気をつけなければなりません。ヨシュアは従っていました。

- b) 独立—ヨシュアは、周囲の他国民と交わらないよう呼びかけました（7節）。また、他国民の神々の名を口にしてはならないと言いました。どんなかたちであれ、異教の神に仕えたり、拝んだりしてはならないと語りました。

ヨシュアは、異教徒と交わることで、神の民の独自性が失われ、神の民としてのきよさに悪影響が及ぶことを危惧しました。

聖書には、独立がはっきりと教えられています。これは、神の本質的なご性質である聖さに基づいています。神は、罪を妥協したり許容したりはなさいません。神の子どもたちの行いに関するみこころにも、神の聖さが影響します。私たち信徒は、「光」である神との交わりへと召されました。このお方の中に暗いところはまったくありません。

ここで、ヨハネ第一1：5-10を読みましょう。

1:5 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているであって、真理を行ってはいません。1:7 しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。1:8 もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。1:10 もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

ヨハネ第一のこの個所は、私たちが暗闇のものと別離する必要性を明らかにします。暗闇とは、聖なる神のご性質に反するものすべてです。

ペテロは、ペテロ第一：1：15-16でこう語ります。

1:15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。1:16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」と書いてあるからです。

エペソ5：11には、「実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。」とあります。

家族や職場でたったひとりのクリスチャンだとしたら、100%イエスに栄光をもたらそうとするのはたいへんなことでしょう。

けれども、神を大切にして、仏教や神道の祭事に参加しないなら、神は必ず報いてくださるでしょう。

サムエル第一2:30に、「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。」とあるとおりです。

ある聖書注解者はこのことについて次のように語ります。「私たちの力は、この世と交わるのではなく、この世から独立することにある。もちろん、クリスチャンでない人と交友しなければならないが、神を神とも思わないこの世の行いに足を踏み入れることは、信仰生活に害を及ぼす。」

(コリン・ペッカム博士、「ヨシュア記 聖書注解デボーション」223ページ)

イスラエルの民は他国民と結婚してはならないと、ヨシュアはイスラエルの指導者たちに語りました。他国民と結婚すると、神の守りの御手から離れることとなります。

婚姻関係というのは、非常に重要な関係です。ユダヤ人の信仰を持たない人と結婚すると、神の守りを失い、たいへんな問題を招くことになると、ヨシュアは警告しました。

配偶者を求めておられるクリスチャンにとって、まず霊的に合う相手かどうかを考えなければなりません。考慮すべき内容として挙げられるのは、「自分と同じ信仰を共有しているだろうか。霊性や信仰において同じレベルだろうか。」などです。

- c) 忠実—ヨシュアは8節で、主なる神に「すがらなければならない」と語ります。22章でも出てきたヘブル語の同じ単語です。その意味は、「ぴったり密着すること」です。先週、サランラップにたとえてお話ししました。私たちは、神との間に何者も入らせないう、神に忠実を尽くさなければなりません。神と私たちの間を何にも引き裂かせてはいけません。

イスラエルの指導者たちが唯一の真実の神への献身を妥協する誘惑にかられるだろうことをヨシュアは予見していました。だからこそ、どんな状況でも神にしっかりくっついていなければならないのです。

神に忠実であることは、どんなときにもなくしてはならない私たちの信仰の姿です。

- d) 愛—ヨシュアは11節で、心から神を愛するようと呼びかけます。愛には大きな力がありますが、それを簡単に説明することはできません。私たちに対する神の愛は非常に力強く、簡単に言葉で説明できません。

新約聖書がギリシャ語に翻訳されたとき、訳者たちは神の愛をどのように訳すか苦労しました。ギリシャ語というのは非常に豊かな言語ですが、それでも神の愛にふさわしい表現がありませんでした。そして、「アガペ」にたどり着きました。この単語は、「犠牲的な愛」を意味します。

つまり、神の愛は、犠牲をいとわない愛です。

神が人類のために多大な犠牲を払われたことは聖書が教えるとおりです。その犠牲とは、神の御子イエス・キリストをこの世に遣わすことでした。

聖書はまた、神の御子イエス・キリストが進んで私たちの犠牲となってくださったとも語ります。私たちの罪をすべてご自身が負ってくださったのです。

Ⅱ コリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。

ですから、私たちが神を愛し、神の愛が私たちのうちにあるなら、私たちも「神のために犠牲」を払う覚悟が必要です。

今朝皆さんにお尋ねします。

「皆さんは、人生の中で神のために犠牲を払う覚悟がありますか。私自身はどうでしょう。」

神は私の人生をご存知です。皆さんの人生もご存知です。

私の経験から言えるのは、神と前進する信仰の計画に召されたら、そこには必ず犠牲が伴うということです。

けれども、犠牲を払う価値が十分あります。神のために犠牲を払うのは、神への愛の証です。神は誰にも借りがありません。私たちが蒔いた種は必ず刈り取ることになります。

ガラテヤ6：7はこう語ります。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」

ヨシュアは死を目前に、イスラエルの指導者たちにおもに4つのことを呼びかけました。

彼らは、神のみことばに従わなければなりません。そして、周囲とは違った生き方をし、犠牲的な愛で神を愛し、神に忠実を尽くさなければなりません。

私たちのクリスチャン生活でも、これらのことが最優先事項であることを望みます。

3. ヨシュアの警告（12-13節、15-16節）

12-13節と15-16節で、ヨシュアは厳しい警告を語ります。

この個所を今度はリビングバイブルで読んでみましょう。

12 もし神様を愛さず、周辺の民族と結婚したりするなら、 13しかと覚えておくがいい。神様は、その住民をこの地から追い出すのを中止なさるだろう。 それどころか、彼らの存在は諸君にとって罠となり、落とし穴となるだろう。 また、わき腹を打つむち、目を刺すとげとなるだろう。 そしてついには、あなたがたのほうが、神様の与えてくださったこの良い地から、消え失せることになるのだ。

15-16だ がな、神様は、約束どおり良いものを与えてくださったと同じ確実さで、諸君が神様に従わない場合には、災いを下されることを知ってほしいのだ。 ほかの神々を拝んだりすれば、この地から抹殺されることになるぞ。 神様の怒りが燃え上がれば、たちどころに滅ぼされてしまうのだ。」

ここは、深く考えさせられる個所です。

神はご自身の民に、神から離れて他国民の習慣を取り入れるなら罰が下ると警告なさいませ。

神は愛の神であられると同時に、正義の神です。罪を罰さずにはおられません。

聖書を読むと、民は後に神に背き、他国民の神々を拝むようになることがわかります。民はこのことで厳しい罰を受け、捕囚としてバビロンに連れて行かれました。

神は、私たちのために約束をしてくださるお方です。同時に、私たちが神のみことばに背くなら、裁きが来ると警告なさる神でもあります。

私たちにくださる神の裁きについて真剣に受け止めることが大切です。

裁きについての教えはとても大切ですし、私たち全員に関係あることですので、ここで少し裁きについての聖書の教えを見ましょう。

旧約聖書も新約聖書も、裁きが現実であることを明らかにします。

詩篇 96:13 確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。

使徒 17:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」

ヘブル 9:27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

聖書は、すべての裁きがイエスにゆだねられていると語ります。

ヨハネ 5:22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。

聖書に記された裁きの時や場所、対象、結果はさまざまです。

1. 過去の裁き。—これは、十字架での裁きです。

ヨハネ 5:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からのちに移っているのです。

ヨハネ 12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

2. 信徒の生活の中に起こる現在の裁き。

コリント第一 11 : 31-32

11:31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。
11:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。

ヨハネ第一 1: 5-7

1:5 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。 1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。 1:7 しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちが互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちがきよめます。

3. 未来の裁き

a) クリスチャンの裁き -

Ⅱ コリント 5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

これは、信徒の救いに関する裁きではありません。コリント第一3：8-16で指摘されるとおり、私たちの働きに対する裁きです。

b) 生きている人々の裁き -

マタイ 25: v. 31-33.

25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来る時、人の子はその栄光の位に着きます。 25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、 25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

マタイ 25:41

25:41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』

c) 大きな白い御座の裁き -

黙示録 20: v. 11-15.

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。 20:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。 20:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。 20:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。 20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

これらをまとめると、まず、イエス・キリストの十字架の死によって自分の罪がすでに裁かれ、代価が支払われたという確信が必要です。

あなたは、イエスに罪の赦しを願い求めましたか。

次に、自分自身を日々裁く必要があります。日常生活での罪をイエスに告白しましょう。
(ヨハネ第一1：9)

そして、イエスのためにしている働きを吟味しなければなりません。火で焼かれるとなくなるような働きでしょうか。それとも、報いの得られる働きでしょうか。

神は、人生のそれぞれの時期に関われるさまざまな働きをご用意くださっています。今神に求められていることを行い、神のみこころの真ん中にいるという確信を得ましょう。

では、祈りましょう。